

〈論文〉

地域の歴史と市民運動

—熊野灘沿岸に原発ができなかった理由を考える—

吉井 美知子

要約

紀伊半島東部の熊野灘沿岸では1960年代より6ヶ所で次々に原発計画が進められたが、すべて地元の市民運動により撤回に至った。本研究では地域の歴史からその理由を探った。その結果、記紀神話、熊野水軍、組織的な捕鯨や漁業、水運、そして太平洋戦争等の歴史が、長い時を経て市民運動の力となっている可能性が示唆できた。

キーワード：熊野灘、原発、市民運動、歴史、芦浜

はじめに

日本には2011年3月の福島第一原発事故発生までの間、すでに廃炉になっていたものを含め17ヶ所の原子力発電所で59基の原子炉が稼動していた（原子力資料室2017：100）。原発には多量の冷却水が必要で、大河のない日本ではすべての原発が海水を汲み上げるため海岸に立地している。

図1に示すこれらの立地地点を見ると、太平洋に面した愛知県から宮崎県にかけて、まったく原発がないことがわかる。計画されなかったのではない。市民の反対運動によって計画が撤回されたのである。

本研究ではこの太平洋岸に位置する紀伊半島東部の海、熊野灘に着目した。三重県側で4ヶ所、和歌山県側で2ヶ所の熊野灘沿いの立地計画がすべて撤回されて現在に至っている。

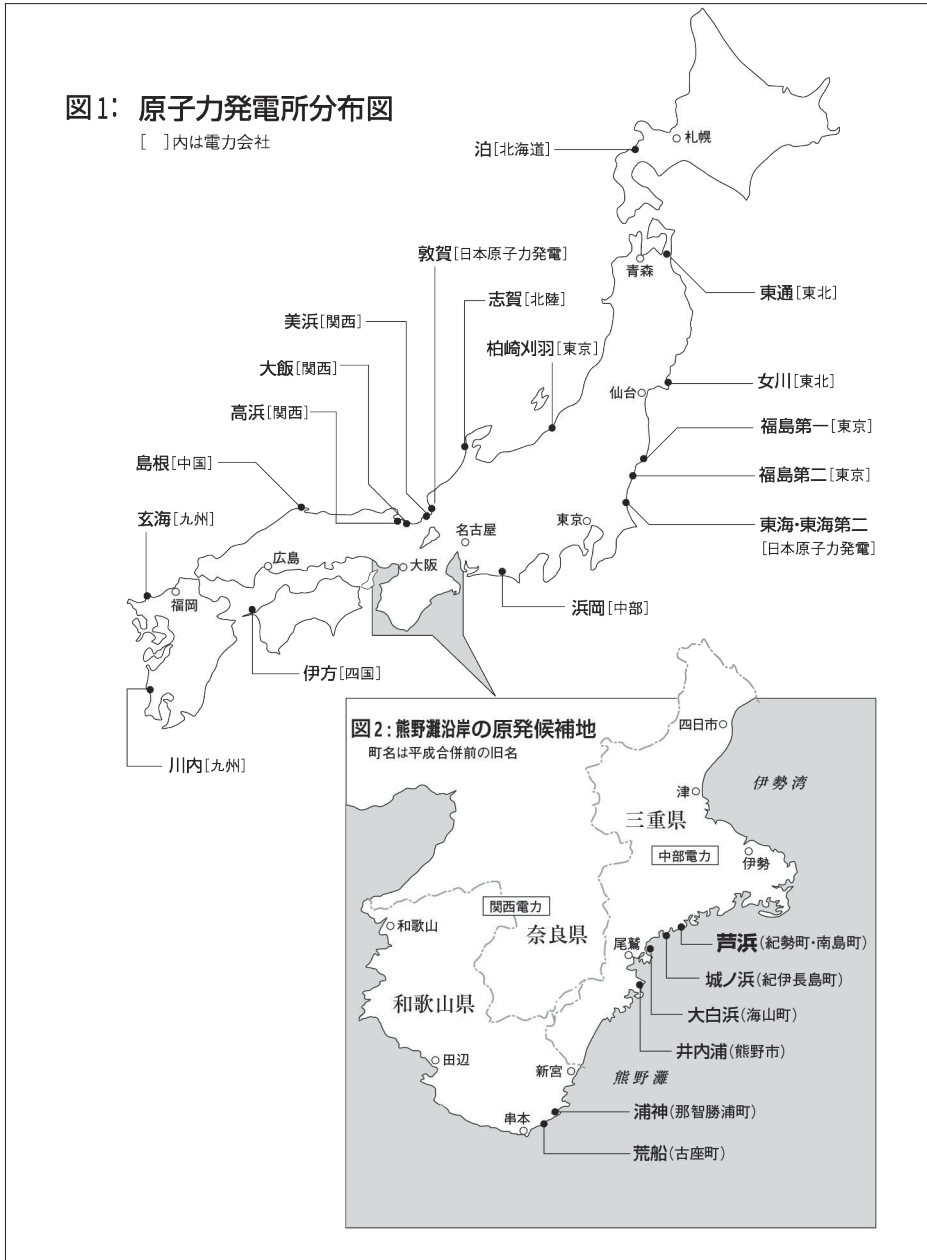


図1：原子力発電所分布図（出典：柴原 2020：12）

図2：熊野灘沿岸の原発候補地（出典：柴原 2020：12 をもとに筆者作成）

「豊かだからできなかった」と断言する三重県民がいる。大都市から遠く離れた過疎の村に建て、原発受入と引き換えに補助金を付けて地域振興を図るとというのが原発計画の常である。しかし果たして熊野灘の場合、地域経済の豊かさだけが撤回に至った要因であろうか。

熊野灘周辺の歴史は古い。記紀神話の舞台になったし、熊野大社は古くからの巡礼コースであった。江戸時代までは水運が栄えた。「交通の不便な過疎地」という状況は、工業化と大都市への人口集中、鉄道や道路網の整備が進む明治以降の話である。この歴史の古さが、原発という現代の異物を排除する運動に何らかの力を与えたのではないか。歴史をひもとくことで、計画を撤回させた市民の力の源泉がたどれるのではないか。このような疑問を持ったことが、本研究の出発点である。

熊野灘沿岸での原発建設計画は、1963年から2001年までの間に6ヶ所の計画地で8回に渡り中部電力、関西電力の二社によって進められ、すべて撤回された。本研究では、第一にこれら6ヶ所の計画の推移をとりまとめ、明らかにする。

第二の目的は、これら6ヶ所を含む熊野灘沿岸の歴史を辿り、20世紀後半に闘われた市民の原発反対運動につながりそうな要素を明示することである。

そして第三の目的として、この歴史を、反対運動を闘う市民の側がどのようにとらえ、力としていったのかを検証したい。

本研究により、政府、自治体や電力会社が、今後どこかに原発をはじめとする迷惑施設の立地の可能性を判断しようとするとき、地域の歴史への視点が重要であることを示したいと考える。また、今回フィールドに定めた熊野灘沿岸で、もしもそのような計画が7度目に出てくれば、世代を超えて反対運動を続けるであろう市民への、応援の意味も込めている。

本研究は短期間にまとめたものではなく、2012年より2020年までの間、8年をかけて少しずつ蓄積したデータをもとにしている。

熊野灘沿岸6ヶ所の原発計画および地域の歴史に関しては、論文、研究書、新聞・雑誌記事、ドキュメンタリー映像等を通して文献調査を行った。また2014年3月までは比較的頻繁に、それ以降も年に1～2回の頻度で原発立地地元を訪れ、あるいは地域で実施される関連イベントに参加し、フィールドでの観察および聞き取り調査を実施してきた。

特に、三重県内の原発計画反対運動の経緯について、次世代への情報発信に取り組む市民団体、「原発おことわり三重の会」が主催する原発撤回周年イベントにはできる限り参加し、体験談に直接耳を傾けた。

第I章では先行研究について概説する。続く第II章で熊野灘沿岸における原発計画の推移をたどり、計画撤回の直接的要因について明らかにする。中部電力および関西電力の二社が、いかにこの地域に原発建設を進めようと執拗に努力を続けてきたか、そしてそれを押しとどめようとした市民が、こちらも辛抱強く、世代を超えて反対運動を担ってきた歴史が明らかになるであろう。第III章では、地域の歴史を概観し、後に原発を撤回させた市民運動につながりそうな要素を取り出して分析する。第IV章で反対運動を行う市民の側からの歴史認識を検討し、「おわりに」で結論を述べることとする。

I. 先行研究

1. 国内の原発計画撤回地域

反原発運動全国連絡会編 1997では原発およびその他の核関連施設50ヶ所以上を網羅し、そ

それぞれの計画から撤回までの経緯を紹介している。ただしこれには、すでに設置された原発の増設反対運動なども含まれている。数が多いため、各ケースの紹介は非常に簡潔にまとめられている。

日本科学者会議編2015では10ヶ所の地域を取り上げ、より詳細に撤回の経緯を説明している。本研究に関する内容としては、芦浜と和歌山の各章があるが、前者については同じ著者のより詳細な近刊、柴原2020を参照した。また和歌山については四国と抱き合わせた、非常に短い事実の指摘に留まる。

研究論文としては、平林2013が挙げられる。多数の撤回事例を綿密にリストアップした資料としては価値があるが、事例数が多いため地域ごとの説明は簡単な紹介に留まっている。いかに多くの候補地が選定されては撤回されていたか、全体的な流れを見ることができた。

本研究は全国の事例を網羅することは目指さない。かといって既に先行研究が数多く存在する芦浜だけに着目したものでなく、熊野灘沿岸というより広い地域に焦点を当てているため、両者の中間として位置づけることができよう。そして、先行研究には見られない、歴史的な時間を遡った分析が独創性を持つと考える。

2. 熊野灘沿岸の原発計画

芦浜原発関連の書籍として、中林1982、北村1986、朝日新聞津支局1994、南島町2002、北村2011、柴原2020を参照した。現場で反対運動を闘った市民、ジャーナリスト、そして自ら反対運動を牽引した自治体による記録であり、なかでも本研究では漁民の視点で芦浜での1960年代の経験を記した中林1982に、そして1980年代以降を経験した柴原2020に負うところが多かった。

海山(みやま)原発に関しては(しかた2017)を、熊野原発に関しては、しかた2018と熊野原発反対闘争史編集委員会1999を、和歌山県側の2ヶ所に関しては、汐見2012と原2012を参照したが、これらもすべて反対運動側による記録である。

研究論文としては、山本2013が1960年代の芦浜原発計画反対運動について詳しく分析している。山本は漁民の反対運動を「文化的実践」と捉え、運動のなかで歌われた歌やデモ隊の編成方法を例として挙げている。本研究では山本論文を参考にこれらの事実を取り上げつつも、「文化」よりはむしろ「歴史」に重点を置いた。

西尾2018は芦浜の第2回戦を中心に、第1回戦との比較から原発反対運動の担い手が漁協を中心として漁民の組織運動から市民運動へと変容していった経緯を分析している。芦浜における運動の推移については詳細に事実を積み上げてあり、反対運動当時の人口や漁業などの地域経済の状況について分析があったが、運動当時の歴史のみに重点を置いていた。本研究はこれに対して、反対運動以前に大きく遡った歴史に焦点を当てている。

3. 熊野灘沿岸地域の歴史

筆者は日本史の専門家ではなく、主として海外をフィールドとする地域研究者である。そのため日本国内の一地域である熊野灘沿岸の歴史を調べるに当たり多くの文献を参照したが、特に地域の歴史の概略を広い視野で説明した先行研究に負うところが大きい。

記紀神話から熊野水軍、水運、捕鯨と漁については、主として森ほか編1992、池田ほか編2020、谷川ほか編2011に収録の各論文を参照した。どの文献もそれぞれの時代の歴史に特化したものであり、それが後世の原発計画にどう影響しているかというような考察はない。ただし水軍の歴史がその後の組織化された大規模な捕鯨や漁につながったことは、多くの論文で指摘され

ている。村を挙げての鰯（ボラ）漁が原発反対運動につながっていることについては、唯一石原1982に言及があった。

熊野灘沿岸地域は、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として熊野古道が世界遺産に登録されたこともあり、近年観光スポットとして注目されている。これに伴い、「海の熊野古道」についても解説した文献が出ているが、主として沿岸地域の歴史や民俗、そして寺社仏閣やハイキングコースを紹介したもので、原発計画が撤回になったことに言及したものはほとんどなかった。唯一、石原2007：131に芦浜がカラー写真とともに簡単に紹介されている。

4. 地域の歴史と迷惑施設

吉井2016aおよび2016bでは、ベトナム初の原発建設予定地の同国南部ニントゥアン省で、2000年の歴史を持つ先住チャム人は計画に大反対、住み着いて最長でも200年の歴史しかない多数民族のベト人はほとんど反対を表明せず、「原発が来ないうちに」とさらなる移住の準備にかかる人々が見られた状況を分析した。

このベトナムの事例のように、迷惑施設の設置に先住民族の土地が狙われやすいのは、古今東西の常である。政治と資本の力で、多数民族がウラン鉱山、原発などの核施設を先住民族の地元に押し付ける。沖縄への米軍施設集中も、この範疇に入るであろう。

本研究では、熊野灘沿岸の市民を「先住民族」と位置づけるものではない。しかし、東京の中央政府や、名古屋、大阪の電力会社本社の視点で「遅れた貧しい過疎地」としての熊野灘沿岸に原発の立地を定めようとするとき、神話時代から2000年に渡り、先祖から海を受け継いできたと自認する人々がどう動くのかを明らかにする。

上村は、先住民族の歴史への視点が乏しい現代社会の構造を問題だとして、次のように述べている：

(…) 高度情報社会と高等教育制度の中で教育を受けた人たちが、自分たちは豊かな知識を持ち、その中で「歴史」も十分に学んだと思い込んでいる構造である。(上村2015：ii)

確かに高校や大学で数学や英語と同時に歴史や地理をも学び、優秀な成績を修めた人々が高級官吏や電力会社幹部になり、原発立地を決定しているのであろう。しかし教科書にも大学入試にも載らない地域の歴史が、それぞれの立地場所にはある。それを示してくれるのが、世界各地の先住民族であり、また本研究で取り上げる熊野灘沿岸の人々であると考えられる。

II. 熊野灘沿岸の原発計画

1. 概観

熊野灘は紀伊半島東岸の海を指し、三重県伊勢市二見町から¹和歌山県串本町までの1,087 kmの海岸線を持つ。これは両県の海岸線総延長のおよそ2/3を占める。熊野市の七里御浜海岸を除くと、ほとんどがリアス式海岸で、海岸には山が迫って平地は狭く、浦々には入り江と漁村が点在する(谷川2011：35)。

この熊野灘沿岸に、1960年代から2020年現在までの間に、全6ヶ所の原発立地が計画され、8回に渡って市民の反対運動により計画が撤回された。各立地場所はすでに図2に示した。それぞれの計画と撤回の時期を表1に示す。

表1 熊野灘における原発計画（筆者作成）

	始まり	立地場所	自治体名（当時）	自治体名（現在）	終わり
1	1963年11月	芦浜（第1回）	三重県度会郡南島町・紀勢町	南伊勢町・大紀町	1967年9月
	〃	城ノ浜	三重県北牟婁郡紀伊長島町	紀北町	1964年7月
	〃	大白浜（第1回）	三重県北牟婁郡海山町	紀北町	1964年7月
2	1968年12月	荒船	和歌山県東牟婁郡古座町	串本町	1990年12月
3	1969年2月	浦神	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	（変わらず）	1981年8月
4	1971年9月	井内浦	三重県熊野市波田須町・磯崎町	（変わらず）	1987年9月
5	1984年2月	芦浜（第2回）	三重県度会郡南島町・紀勢町	南伊勢町・大紀町	2000年2月
6	2001年2月	大白浜（第2回）	三重県北牟婁郡海山町	紀北町	2001年11月

本研究では歴史的な視点から原発計画を分析するため、敢えて県境を越えて「熊野灘」という括りを取り入れた。これは明治の廃藩置県まで熊野灘沿岸が紀州藩に属し、歴史的に一体感をもってとらえられてきた事実に基づく。ただし原発が計画されはじめた1960年代以降でみるとこれらの立地計画は三重と和歌山の二県にまたがり、また推進する電力会社も中部電力と関西電力に分かれている。

表1にも掲げたように、立地場所の自治体名は町村合併によりその後変化したところもある。本研究では原則として、原発計画が進行中であった当時の自治体名を使用することとする。

表1の立地計画の推移を見てみる。電力会社側は1963年にまず3ヶ所を同時に提案、各自治体に「早く立地を要請しないと計画を逃すぞ」という競争心を煽ったと見られるが、実際は芦浜（南島町・紀勢町）が本命で、あとの2ヶ所はダミーだったといわれている。実際、筆者が3ヶ所を訪問したところ、素人目にも芦浜だけが別格の広さで、比べると城ノ浜（じょうのはま、長島町）と大白浜²（おおじろはま、海山町）はいかにも狭い。計画は原子炉2基であったが、芦浜を訪れた専門家が「10基、造れますね」と言った（柴原2020：9）ことがこの事実を補強している。

1年もたたずに城ノ浜と大白浜の2ヶ所の計画が消え、芦浜で推進側と反対側の一大闘争が起こる。これを市民側の視点で「第1回戦」と呼ぶ。1984年から始まる第2回戦と対比させた呼び名である。本研究においても、この呼称を使用することとする。

芦浜第1回戦が終わると、今度は1960年代の終わりに、和歌山県側の2ヶ所で計画が持ち上がるがこれらも実施されない。1970年代に入り、中部電力が第1回戦で立地できなかった芦浜に代わり井内浦（いちうら、熊野市）を計画する。これが長引くうちに芦浜第2回戦が開始され、2000年に白紙撤回、最後に撤回されていた大白浜が再度持ち上がり、その年のうちに住民投票で否決されて終了するという流れである。

こうして熊野灘の6ヶ所の計画地には、1基の原子炉も建てられないまま2020年現在に至っている。これらの推移からは、何としてでもこの地域に原発を建てようとする、電力会社そしてそれを後押しする国の執拗なまでの意志が感じられる。1ヶ所で立地が進まなければ、同時進行で他所に、他所でも失敗すればまたもとの立地場所にと、1,000キロメートルほどの海岸を行ったり来たりという繰り返しである。そしてそのたびに、熊野灘沿岸の市民が立ち上がり、計画を止めてきたのであった。

2. 芦浜第1回戦と城ノ浜、大白浜

3ヶ所の原発計画は同時に発表された。1964年11月、中部電力が田中覚三重県知事に熊野灘での原子力発電所建設計画を示したことを受け、知事が南島、紀勢、長島、海山の四町長を呼び、協力要請を行った。そしてこの計画が2日後に新聞一面で報道されるや、地元の市民は大いに驚いた。

当初より四町長は、慎重な姿勢を見せつつも腹のなかでは原発誘致を決めていた。しかし大白浜のある海山町でいち早く反対デモや集会が行われ、候補から外れることとなった。記録によると、「海山町では、早い時点で多くの住民が、原発の危険性に関して勉強し、かなりたくさんのお情報を持っていた」ことがその理由としている（南島町2002：49）³。

一方、熊野灘沿岸漁協は1964年2月、原発立地反対を決議し、闘争本部を立ち上げた。記録より引用する：

熊野灘の原発反対闘争は、漁民にはじまって漁民の手で閉じられる。三候補地のうち、どの地に来ようが、原発には反対だ（・・・）（同掲書：51）

このように、熊野灘沿岸6ヶ所で原発計画を止めたのは、主として地元漁民であった。これは原発建設には、地元漁協による漁業権の放棄を必要としていることから、自治体が推進しても計画を止める力を持つのが、最終的には地元の漁協とその構成員である漁民になるためである。

1964年7月、中電は立地調査地点として芦浜を決定したと発表する。これで城ノ浜も候補から外れたことを受けて、長島町は終息宣言を行った。宣言文では原発計画を大型台風にも例えて、長島がすっぱり目の中に入ったが、すでに過ぎ去ったとの旨が記されている（山本2013：86）。

芦浜は南島町と紀勢町にまたがる無人の海岸にある。自動車道路は通じていない。敷地は南島町と紀勢町にまたがっていて、漁業権も前者の古和浦漁協と後者の錦漁協が分け持っている。紀勢町長は誘致に前向きであったが、当初は原発誘致に賛成だった南島町長は同年8月のリコール運動で辞任、無投票の反対派町長が選ばれ、町長、議会、漁協が一つになった町を挙げての反対闘争に入った（同掲書：55）。立地する2つの町の意見が分かれたのである。

1964年7月24日、南島町七漁協は合同で海上デモを行う。中林1982より引用する：

（…）早朝、各地区漁港から出港した漁船四〇〇隻。一船に五、六人乗って総勢約二〇〇〇人以上。神前浦沖合で船団を組み、阿曾浦の甚正丸に船団長・浜地初男闘争委員長が乗船し、総指揮船として先頭に立つ。各船大漁旗をはためかせ、原発反対のプラカードを掲げ、四列縦隊の大船団の堂々たる航行は壮観そのものであった。（中林1982：62）

中林によると、これはわが国初の漁民による海上デモだった。このデモ以外にも、知事と県議会への陳情、中電に出向いての抗議、集会、2,000人規模のデモ、延べ1,500人にのぼる県議会傍聴などが繰り返されたという（柴原2020：21）。

芦浜第1回戦の最大の山場となったのは、1966年9月19日の長島事件であった。反対運動を抑えて何とか計画を進めようと、国は衆議院科学技術振興対策特別委員を現地視察に派遣した。日本への原発導入を主導し、後に首相となる中曽根康弘が団長であった。一行が紀伊長島町名倉港から海上保安庁の巡視船「もがみ」で芦浜に向けて出航しようとするのを、漁船団が取り囲み実力阻止した事件である。

一行は視察を断念したが、「血をもって阻止する」と宣言していた漁民のうち30人が逮捕され、うち25人が公務執行妨害と艦船侵入で起訴され、有罪となった。全員が古和浦漁協のメンバーであり、中にはまったく議員や保安庁職員と接触のなかった冤罪の人もいた（柴原2020：27）。

中林 1982 には、1 ヶ月にわたる自身の獄中記も載せられている。

事件がきっかけとなり、推進の決め手を欠いた県知事が終止符宣言を出し、翌 1967 年 9 月、芦浜第 1 回戦は終了した。

3. 関西電力の 2 ヶ所、古座と那智勝浦

芦浜第 1 回戦終了の翌年の 1968 年 12 月、和歌山県東牟婁郡（ひがしむろぐん）古座町が議会で原発誘致決議を採択する。計画地は同町の荒船である。

背景には電力会社の思惑がある。関西電力は福井県に集中していた原発を、バランスをとるため南の紀伊半島にも建設したいと考え、「紀伊半島電源基地化構想」を立てていた。1967 年に紀伊水道に面した和歌山県日高郡日高町で誘致決議がなされ、その後を追うように熊野灘沿岸の古座町でも決議したものである（浅里 2012：23）。

さらに翌 1968 年 2 月、今度は古座の東隣の那智勝浦町議会が誘致を決議する。場所は荒船に接する浦神である。真っ先に反対したのは、太地町であった。捕鯨で有名なこの町は、浦神から数キロメートルに位置している。1969 年 1 月に両原発に反対の決議を行ったほか、住民による県庁への陳情や大会、そして反対デモを行った（寺井 2012：130-131）。

その後反対運動は立地 2 ヶ所の漁協と住民、そしてさらに周辺漁協や市民に広がり、「紀南漁民原発反対協議会」が結成され、陸上海上でデモが行われた。こうした世論を背景に、1971 年 10 月、那智勝浦町議会は「原子力発電所の誘致設置に反対する決議」を正式に採択した。それでも関西電力は強引に地質調査を進めようとしたが、市民による環境庁長官や県知事への陳情を経て、1981 年 8 月、最後は町長への公開質問状に対する「設置反対」回答により、那智勝浦町での計画は撤回に至った（同掲書：137）。

先に誘致を決議した古座町のほうは、決着が長引いた。推進側から地元議員や漁協の切り崩しが図られた模様である。町議会議員選挙では反対派が後退し、古座町津荷（つが）漁協では反対決議の白紙撤回があるなど、計画実施に傾いていた。そこへ 1979 年米国でスリーマイル島原発事故が発生してまたも反対派が盛り返すなど二転三転を繰り返し、最後はチェルノブイリ原発事故を経た後の 1990 年 12 月、古座町議会が設置反対の決議を全会一致で可決することで遂に計画は終息した（同掲書：141）。

4. 熊野原発

芦浜第 1 回戦に敗れた中部電力が熊野原発計画を進めていることが 1971 年 10 月、地元の新聞にスクープされた。場所は三重県熊野市波田須町（はだすちょう）と磯崎町にまたがる井内浦（いちうら）である。三重県知事は記者会見で「芦浜問題に決着をつけてからにすべきだ」と批判口調で語り、熊野市長は白紙回答とするが、反対協議会事務局長の更谷によると両者とも推進派である。

市内の六漁協は同年 11 月、全員一致で反対を決議する。理由は「温排水や放射能もれなど漁業への影響大」だからであった。漁協以外にも、釣りクラブ、文化協会等、多くの市民団体が次々に反対を表明した。市民は芦浜、そして県境を越えた太地や那智勝浦の団体とも連携して運動を行った。デモや集会など原発反対の市民運動が高まるなか、1972 年 2 月、熊野市議会が最初の原発拒否決議を採択する。

ところがこれで落ち着かず、推進派が巻き返す。翌年には市長が前向き発言に転じ、市内漁協のひとつ、木本漁協が原発反対を白紙撤回するなど、切り崩しが進む。米国のスリーマイル原発事故の後にも調査研究が続き、何度も市議会の拒否決議を経ても止まらず、最後はチェルノブイリ事

故の影響を受けて1987年9月、市議会が原発抜き地域活性化案を満場一致で可決し、やっと17年間におよぶ原発計画が終了した。

5. 芦浜第2回戦

熊野灘沿岸の原発計画で、最も激しく推進側と反対市民側が闘ったのが芦浜第2回戦であろう。第1回戦の長島事件のような華々しい成果はなく、大勢の逮捕者を出したわけでもないが、16年に渡ってコミュニティが破壊されてきた地域への影響は甚大であった。

1967年に一旦終止符が打たれた芦浜第1回戦のあと、中部電力は熊野原発の立地に注力する。しかし芦浜の敷地はすでに電力会社が購入済みであり、その間も水面下で市民への対応を進めながら計画再開の機会を窺っていたものと思われる。井内浦での計画が市民の反対により思い通りに進まなくなるなか、1984年、遂に芦浜第2回戦が開始された。

1984年2月、田川亮三三重県知事が原発予算3000万円を計上、これを記録は「第2回戦の宣戦布告」と位置づけている（南島町2002:78）。三重県や紀勢町が推進へ動くなか、南島町の市民への切り崩し作戦が繰り返される。特に芦浜の漁業権を有する南島町古和浦漁協への圧力は大きかった。金の力で調査受け入れを迫り、漁協内での選挙票の買収、無料の飲食提供のほか、反対する市民に対しては驚くべきいやがらせが横行した。脅迫状や注文しない商品が毎日届く、夜中に無言電話がかかる等である。暴力沙汰も起こるが、公正な捜査は行われない。隣同士で挨拶もせず、親戚の冠婚葬祭にも呼ばれない。人口わずか1,700人（1980年国勢調査）の小さな漁村は推進と反対に引き裂かれ、すっかり人間関係を破壊されてしまった。

第2回戦の最大の山場は、1994年12月15日の古和浦漁協臨時総会の阻止であった。すでに漁協内で推進派が多数となり、中部電力が申し入れた海洋調査への同意がこの日議決されようとしていた。海洋調査は計画実施に等しい。この総会開催を漁協前に座り込んだ2,000人の市民が阻止したのである。海洋調査は始まらない。

開戦当初より反対集会、海上デモ、陸上デモ、勉強会、講演会、立看板、都市部での魚の無料配布、原発反対の仕掛け花火、町長への要望書提出、他地域との交流会、年賀チラシの配布等、ありとあらゆる手段を駆使して反対運動に取り組んできた市民は、遂に呼びかけの範囲を三重県全土に広げ、県民の反対署名を集める活動を始めた。熊野灘から津市や四日市市など都市部を含む県内各地に出向き、署名を呼びかけたのである。県内有権者数142万人のうち50万人分を目標にしたところ、1996年5月までに半数を超える81万筆を集めて知事に提出した。

これが自民党県議をも動かし、その後の冷却期間と知事本人による現地視察を経て、2000年2月、北川正恭（まさやす）三重県知事により県議会で計画の白紙撤回が宣言され、第2回戦は終了に至った。

6. 大白浜の再浮上

1964年、芦浜第1回戦のはじめと同時に候補地となりすぐに外れた海山町の大白浜では、その後も水面下で誘致の動きが続いてきた。芦浜第2回戦が終わりここへの立地が完全にできなくなると、今度は大白浜が再浮上する。

2001年2月、5,606筆、すなわち町民の64%の原発誘致署名が集まり、請願書が町議会に提出された。同年9月、町長提案の住民投票条例案が議会で17名中12名の賛成で可決され、自治体主導で原発の是非を住民投票にかけることとなった。自治体側では多くの誘致署名が集まったことから、投票でも誘致票が多数を占めると考えていたのである。

反対する市民らは、黄色いハンカチに原発反対のスローガンを書いて街に飾ったり、わかりや

すいマンガで原発の危険性を伝えるチラシを配ったり、軽トラックに積んだ大漁旗をなびかせながら町内をデモしたり、原発敷地内の立ち木を購入して所有者の名札を付けたり⁴、非漁業者の市民にサンマを配りながら反対を呼びかけたりと、工夫を重ねて短期間に精力的に運動を実施した。住民投票の直前には、町内で大きな反対集会を開催し、1,400名を集めている。

これらの運動が功を奏し、2001年11月、住民投票の結果は誘致賛成が2,512票、反対が5,215票となり誘致計画は頓挫した（しかた2017:13）。誘致署名のときには対面では断りづらくやむなく署名した住民が、多数反対票を投じたと思われる。

その後2011年3月からの福島原発事故を経て2020年現在まで、熊野灘では一切の原発建設計画が再浮上する気配は見られない⁵。

7. 6ヶ所からわかること

熊野灘沿岸の6ヶ所で持ち上がった原発建設計画のうち、6ヶ所すべてで市民による反対運動が功を奏して、計画が1回ないし2回に渡り白紙撤回となっている。ここでいう「市民」とは、熊野市、新宮市といった特定の都市の住民という意味ではなく、自身の権利を自覚して自律的に行動を取る住民を指す。

原発計画の推進には、電力会社が敷地だけでなく沿岸の漁業権を買い取る必要があるため、漁協の意見が重要である。芦浜第1回戦では、南島町の七漁協が丸丸となって反対運動を担った。ところが第2回戦では、漁民を中心としながらも農林業者、さらには学校教員、医療従事者、女性など、さまざまな市民が自主的に団体を結成し、反対運動を進めていった。

特に各立地地域では、女性による反対運動が特筆できる。芦浜第2回戦の最大の山場で、漁協前の座り込み最前列にいたのは漁家の女性たちであった。海山の黄色いハンカチを集めた飾りつけや、各地でサンマやイワシを配りながら反対を訴える運動なども、女性ならではのアイデアと行動で彼女らの担った役割の重要性を示している。県知事、県議、町長、町議らの政治家や自治体職員、そして漁協組合員がほぼ男性ばかりで占められるなか、肩書きなしにネットワークを組み、辛抱よく反対を続けた女性の役割は重要である。

熊野灘6ヶ所の市民は、お互いに交流をしながら反対運動を進めていった。和歌山県側の古座や那智勝浦では、計画が浮上するやすぐに芦浜を訪問している。熊野の井内浦では、古座、太地、那智勝浦に助言を求めて参考にするなどである。そしてどこかの場所で反対集会やデモがあれば、出かけて行ってお互いに加勢しているのである。

III. 原発反対の市民運動につながる地域の歴史

1. 記紀神話

古事記および日本書紀によると、日本建国の女神アマテラスが降臨したのが伊勢であり、彼女は太陽神である。アマテラスには弟スサノヲがいて、姉とは対照的にすさんだ荒ぶる神である。このスサノヲが降臨したのが出雲で、その後紀伊国へと渡り、最後に死者の国である根の国に至る。その根の国は熊野だという。池田によると、当時の政治や宗教の中心であった大和や伊勢から離れた、秩序の埒外を象徴するのが熊野である。周縁と暗闇の世界、ここへ追放されたスサノヲが山中から農業の神への復活することに惹かれて、人生の起死回生を賭けて人々は熊野詣でに出かけるのだという（池田2020:40-41）。

後に初代神武天皇になるカムヤマトイワレヒコは、九州の高千穂から東征の旅に出る。16年もの長い年月を経て東進し、河内から直接大和に入ろうとして先住民との戦いに敗れ、迂回して

海路で紀伊半島をめぐり熊野に上陸する。熊野では地元の女族長ニシキトベと対決して苦戦するが、別の大和地方の先住民に助けられてこれを破り、大和に至り、勝利を重ねて天皇として即位する。熊野の迂回路は、天下を取るまでの通過儀礼、試練であると池田はいう（同掲書：52-54）。

このように神話のなかで熊野は常に、中央権力から周縁化され、太陽に対して闇、生に対して死という対比された負のイメージで登場する。そしてその陰から陽へとスサノヲやイワレヒコが通過していった苦難とその後の成功体験に惹かれて、後世の人々は祈りと再生を求めて熊野巡礼へと旅立ったのであろう。

中央権力のあった大和や宗教の中心であった伊勢から離れ、周縁とされた熊野は、現代の東京の政治権力からみた周縁であり、また県レベルで原発を誘致すると決めた県の政治の中心地、津市や和歌山市からも開発すべき周縁の過疎地であり、名古屋市や大阪市にある電力会社の本社にとっては、人口密集地から十分離れた格好の原発建設予定地であったろう。

東征してきたイワレヒコに女族長ニシキトベが闘い敗れたのは、彼女の地盤である丹敷浦（にしきうら）であり、その位置について諸説あるなかで森は「三重県紀勢町錦が有力」としている（森1992：27）。芦浜原発予定地の紀勢町側の地元である。またニシキトベは、後に原発立地予定地となる串本町や那智勝浦町でも今日まで大切に祀られている。このことについて、桐村は次のように述べる。

ニシキトベから見れば神武は侵略者で、先住民のリーダーは自分たちの土地を守るために戦い、倒れた。戦前の皇国史観華やかなりしときも、熊野の人々びとはそんな「抵抗者」「反逆者」に思いをさせ、その墓を守った。（桐村 2020：204）

ここでは周縁の地、熊野の人々が、中央の侵略から自分たちを守ろうとして倒れた女性リーダーにかける想いが読み取れる。

また「女性」というキーワードからは、イザナミの神話も注目される。アマテラスとスサノヲの母、イザナミは末息子の火の神カグツチを産む際に子宮を焼かれて死んだとされる。そのイザナミを祀っているのが自然の巨岩がある熊野市有馬の花の窟である。現在も例大祭が続いているが、ここは熊野原発予定地の井内浦からわずか4キロメートルである。熊野の谷川や河川の水、そして海水を、中上は妊婦の羊水にたとえて次のようにいう。

生を授けるのが熊野の自然だとしたら、海も山も川も滝も、すべて水の素質を有している。血液の循環を助けるように、清らかな水がある。（中略）原発という脅威の人工物も、熊野で起こり得る黄泉がえりの力、超常力も、等しく人智を超えた力であり、イザナミの子宮がそれすらも飲み込む海へ続いているように。（中上 2020：136）

ニシキトベやイザナミが原発計画を止めたというのはいいすぎであろうが、ふたりの女神を祀り続ける地元の市民が、中央の侵略に抗い、清らかな水を汚す脅威の人工物を拒否したということ、そして原発反対運動に女性が大きな役割を果たしたことは因果関係があるといえないだろうか。

周縁化されてヤマト王権に敵対する熊野、そして女性というキーワード、これが記紀の日本建国神話から浮かび上がる熊野の特徴である。

2. 熊野水軍

時代は下り平安時代末期の12世紀初頭、朝廷は熊野灘周辺海域に統制権を持つ有力者、熊野別当らに「南海道海賊」についての調査を依頼する。諸国の運上物を盗み取られる事案が多発し

ていたためである（阪本 2011：119）。これを端緒として、熊野灘から紀伊半島西部にかけて、熊野水軍が整備されていく。中心となったのは、別当家嫡流で新宮を拠点とする新宮水軍と、同家庶流による田辺水軍である。

源平の内乱が勃発すると、当初平氏側についていた熊野別当は途中から源氏側に転じ、熊野地方のすべての海賊を熊野水軍として動員、2,000人を率いて壇ノ浦の海戦で源氏の勝利に貢献した。こうして熊野水軍は鎌倉幕府の体制内の水軍としての地位を得た（同掲書：121）。

ところが、13世紀後半から14世紀にかけて、熊野別当の地位や幕府との関係をめぐって、何らかの対立と抗争が起こっていたようで、14世紀はじめ、「四国ならびに熊野浦々海賊」による一斉蜂起が勃発、「熊野水軍」は一転「熊野悪党」と呼ばれ、誅伐の対象となった。幕府内で力を伸ばしてきた北条氏に、海上交通の諸権益を奪われそうになったことが原因とみられる（同掲書：127）。

「水軍」というとその後の帝国海軍や海上自衛隊などにつながるかと想像しがちだが、いわゆる職業軍人ではなく、事があれば馳せ参じるが普段は魚を取り生計を立てる漁民であったと考えられる。あるいは自身の生活圏を通航する他所の船から通航料を取り立てる「海賊」も生業であったかもしれない。

この「海賊」に関し、山内は「土着的海賊」と「政治的海賊」の二分類を行い、前者はまさに通航料取り立ての行為、そして後者は反政府的行動を取る集団というふうの説明している（山内 2018：203）。

14世紀の南北朝時代、熊野水軍は主として南朝を支持した。「熊野水軍」とひとまとめに呼ぶが、小山、塩崎、泰地などの各一族の集まりである。一族ごとに根拠地とする浦々の岬に山城を構え、海の見張りを行った。そして旗や幟、狼煙や法螺貝等を使い、連絡を取り合っていたとする。この伝統は後の捕鯨の技術に引き継がれている（網野 2018：292-293）。

後の原発との関連では、南島町古和浦の古和一族が南朝側として著名であり（稲本 1992：346、桑野 2009：132）、二度に渡る芦浜原発反対運動に中心的役割を果たした漁村に、水軍の歴史があったことがわかる。

戦国時代になると、鳥羽を拠点とした九鬼水軍が出現する。当主の九鬼嘉隆はもともと紀州九鬼（三重県尾鷲市）の海賊の家系であるが、先祖が大王崎（三重県志摩市大王町）に進出していたのである（山中 2005：109、吉川 2020：45）。嘉隆は伊勢湊に造船所を設置して造船術を発展させた。織田信長の石山本願寺との戦いでは、大坂湾の海戦で毛利軍の水軍を撃破した。その後は豊臣秀吉の朝鮮出兵にも水軍を率いて参戦している。

明治の廃藩置県で熊野灘沿岸は三重と和歌山に分断される。中央政府がこの地を警戒してわざと分けたという土地の人の話を桑野が紹介しているが、それほどまでに中央に抗う力のある土地柄であったことが窺える（桑野 2009：77）。

熊野灘沿岸で原発計画が発表されるたびに実施される漁民の海上デモ、そして芦浜第1回戦で巡視船を立ち往生させた漁船団の闘い、これらは現代の「政治的海賊」であり、中央政府に抗う熊野水軍の流れを汲むといえないだろうか。デモや集会が開催されるごとに県境や漁協の範囲を越えて集まる漁民と漁船の運動は、「水軍」や「海賊」の歴史を経た熊野灘の漁民の団結力を示しているように感じられる。

3. 水運

すでに5世紀中ごろには、瀬戸内海から紀淡海峡、熊野灘を経由した海上の道があったこと

が、古墳等の考古学調査で明らかになっている（伊藤 1992：216）。これが平安末期以降になると、各地に出土する土器などから推測するに、紀伊半島を中心とする太平洋の航行はすでに「廻船」と呼べるほど安定的かつ日常的であったという（網野 1992：283）。

熊野灘には黒潮が北東向きに流れている。同時に陸地に近いところでは、北から南へ流れることが多く、黒潮逆流や熊野逆流と呼ばれている（三石 2011a：43-44）。これらの海流に乗り、また風を受けて古来より多くの船が行き来した。時代とともに政治の中心が京都から鎌倉へ、再び京都、そして江戸へと変遷しても、熊野灘は東西をつなぐ物流のメインルートであり、現代の陸上輸送での JR 東海道本線や名神・東名高速道路に当たるともいえる。

江戸時代には、菱垣廻船や樽廻船が上方の物資を積んで江戸へと航行した。熊野灘沿岸の浦々は風待ち港として繁栄したのである。そこでは都会からの最新情報や文化面での影響ももたらされたであろう。

水運の利用は明治に入っても続き、三重県北端の桑名から熊野灘沿岸に生活物資を運ぶ赤須賀船が就航していた。これを三石は「海のコンビニエンスストア」と呼んでいる（三石 2011b：201）。その後鉄道が尾鷲（おわせ）まで開通し、太平洋戦争が始まると水運は途絶えていった。

原発は巨額の補助金と引き換えに、産業が乏しく交通の便が悪い過疎地を狙って立地するのが常だが、計画が持ち上がるつい数十年前まで熊野灘は物流のメインルートであり、都会の情報ももたらされる先進地域であった。これを柴原は次のように説明している。

熊野灘沿岸といえば、陸路中心の視点からは「僻遠の地」だ。「遅れた地」と見なす者もあろう。本当にそうだろうか。文化文明が交易ルートを通じて到来するならば、江戸時代の南島は決して「遅れて」などいなかった。（柴原 2020：38）

そして柴原は、幕府御城米を山形から江戸に運ぶために 1672 年、江戸の豪商、河村瑞賢（1618 - 1699）の開いた西廻り航路に言及する。南島町の方座浦が寄港地となっているが、南島町は芦浜原発反対の中心となった地である。そして、航路開発だけでなく大坂の治水工事や江戸の建設工事等に大きな功績を挙げた瑞賢が、南島町東宮の出身であることを柴原は誇るのである。平安時代の藤原家の血を引く貧しい家に生まれた瑞賢は、13 歳で江戸に出て人足となり、やがて出世して大活躍をした。2018 年、瑞賢の地元南伊勢町ではこの地元出身の偉人を讃えて、生誕 400 年記念事業が実施されている。

4. 捕鯨と漁

1968 年、原発誘致決議が出された古座町、そして翌年、誘致決議をした那智勝浦町の原発にいち早く反対を表明した隣の太地町は、古来より捕鯨で有名な場所である。熊野灘は豊かな魚群を運ぶ黒潮が最も陸地に近く流れる海域であり、鯨も秋から春にかけては東から西へ、春から夏にかけては反対に西から東へ回遊する（田上 1992：369）。

田上によると、太地と古座の捕鯨は本格的な組織鯨猟として全国的にも珍しいとする（同掲書：371）。最も古い記録が 11 世紀と、全国でも早いことから太地がわが国の捕鯨発祥の地といわれているのである。

鯨猟の組織は複雑で大規模である。そのため鯨猟に適した海域や湾といった自然条件のほか、鯨猟特有の人的組織が形成できる浦でしか、本格的な鯨猟はできなかったとされる（同掲書：380）。太地では、本部、大納屋、山見、沖合、鯨始末係、筋士という大きな役割分担があり、さらにそれぞれが細分化されていた。本部は鯨全体を指揮する太地氏が務めたが、この太地氏の出自は中世の熊野水軍の系譜を持つ（同掲書：381）。

17世紀、宰領の太地頼治は新たな網捕り法を考案、これで大型鯨の猟が可能となり江戸時代末期まで太地鯨方の中樞を担った。これについて田上は次のように説明する。

太地においてわが国捕鯨業発祥の地といわれるほど鯨猟が興隆をみたのも、宰領である太地氏が熊野「海賊」-海の領主の系譜をもち、多くの家臣団を抱えていたことに加え、海上での彼らの卓越した戦闘技術や、数十艘からなる各種の舟を所有しえたという前提条件があったからにはほかならない。(同掲書：383)

すなわち、熊野水軍や海賊の戦闘技術、そして組織力が後の捕鯨につながっていることがわかる。熊野灘沿岸で鯨猟が行われたのは、太地と古座だけではない。沿岸各地に鯨墓や鯨の供養塔が建てられていることから、その広がりが見える。海山町白浦には1758年建立の供養塔が残っているが、ここは海山原発計画の反対運動を主導した浦である。同町では、「大白祭礼（鯨船行事）」も伝わっていて、まさに原発立地予定であった大白浜の名前が冠されている。

鯨以外にも、大きな魚群に相対するときには、組織的な漁が行われた。南島町奈屋浦では、1867年にいちどに鮪（マグロ）3,000尾を捕ったという記録がある（野村 1982：440）。組織で対応しなければ捕れない量である。同じく南島町の贅浦（にえうら）では鯨敷網漁が行われていた。浦を取り巻く8ヶ所の岬の高台に荒見場を設け、菅笠や手振りで合図しながらボラの数や位置を知らせるのである。合図を受けて20隻以上の船が現場に急行し、幅60メートルにも及ぶ網を広げてボラを捕るもので、盛時には100人を越える村人総出で行われ、1973年まで続いていたとされる（石原 1982：255）。この鯨敷網漁について、野村は次のように説明している。

このように、鯨敷網漁法は、荒見の魚群の見張りや、その伝え方、あるいは獲り方などに兵法色がうかがわれることから、きわめて海賊的であり、水軍色が強い漁法であった。（野村 1992：458）

1965年、芦浜第1回戦で南島の漁師たちが漁船で巡視船を囲んだとき、この鯨敷網漁はまだ行われていた。その組織力、団結力が大いに応用されたのではないかと考えられる。そしてこのことから、熊野水軍から鯨猟や漁へ、鯨猟や漁から反原発海上デモや海上行動へと続く歴史の流れが説明できるのではないだろうか。鳥羽市に自ら開設した「海の博物館」の館長で運動に参加した石原義剛（よしかた）は次のように述べている。

熊野漁民が熊野水軍でもあった古い時代には、ボラ網はその平常訓練であったかもしれない。（中略）ボラ網によって培われた南島漁民の協同の精神は、いきいきと芦浜反原発闘争の中に甦っていたように見える。（石原 1982：255）

5. 太平洋戦争

1985年に編纂された「南島町史」には、西南の役から太平洋戦争にかけて、町内より動員されて亡くなった戦没者計724名の名簿が掲載されている。このうち昭和になってからの戦没者が大部分を占め、696名である（南島町 1985：677-696）。1940年時点の町内の男性人口が7,361人（南島町 1985：13）であり、男性の約11人にひとりが軍人として亡くなった計算になる。この男性人口のなかには、子どもや老人も含んでいることから、壮年男性のなかから多くが動員されたことが推測できる。生還した南島町民が何名いたのか資料からは明らかでないが、第1回戦で指導的役割を果たした漁民の多くが、軍隊経験者であったろう。

このことは芦浜第1回戦にどのような影響をもたらしたのか。まず、海上デモや長島事件での巡視船への実行行使に見られるような組織行動に、軍隊式の上意下達組織が取り入れられたことが挙げられる。1966年6月、長島事件に先立つこの時期に、熊野灘原発対策協議会は緊急委

員会を招集し、中電側が強行しようとする立地調査を阻むため臨戦体制を敷くこととなった。その会合の様子を、中林は次のように描写する。

実力組織要項をつくるに当って、論議沸騰。なにしろほとんどの委員が軍隊経験者で経験豊か、われこそが大塚になったつもりで意見を述べる。結局、旧軍隊式それも陸海混成軍の風変わりな組織ができあがった次第である。(中林 1982 : 168)

そしてこの論議の結果できあがった「原対協実力行使実施組織図」を、中林はその著書に掲載している(同掲書 : 169)。会長をトップに、三役、四組織、七分団、各分団の下に五小隊、各小隊の下に五班を持つ、見事な組織体系である。記録を著した中林は古和浦漁協の専務理事であったが、非正式に「中林参謀長」と呼ばれていた(平賀 1982 : 243)。

漁民は中電の調査強行に先立ち、1966年8月、200名が芦浜現地踏査を実施する。陸路、炎天下の山登りである。踏査は示威運動を兼ねていた。

真夏の太陽は容赦なく照りつける。(…)ようやくにして山上に辿りつくが口をきく者さえないほど。戦時中の山岳強行軍が甦る。(同掲書 : 171)

この200名のなかに、恐らく古和浦の西脇八郎氏も含まれていたものと想像する。証言記録によると、西脇氏は九州、福岡甘木の飛行隊の航空技術兵であったが中国南京で捕虜となり、苦役としてドラム缶に土を入れて7キロを歩いて運び、道路建設を行ったという(南島町 2002 : 18)。芦浜現地踏査には、こういう経験を持った人々が多くいたのであろう。

中林は長島事件当日の朝、南島町で夫を送り出した婦人の証言も紹介している。

「当日、方座浦漁港でも、参加船五〇隻が湾内で船団を組み、漁協長船を先頭に各船大漁旗、日の丸をはためかせて堂々と出港しました。これを見送る婦人部員役一〇〇人は神社の高台に集まり、(中略)『しっかり頼みますよ!』と大声をはりあげて、声援を送りました。まるで出生兵士を戦場に送るような必死の光景でした。」(同掲書 : 189)

この「必死」の見送りが単なる危惧ではなかったことは、後に明らかになる。漁民のうち30名が逮捕されたのだから。また国会議員団を乗せた巡視船がもし強行出港していれば、流血の惨事になっていたことが想像される。

どの漁船もカンコ(魚槽)の中にいっぱい石つぶてを積んで行ったと聞かされたとき、身の毛のよだつ思いがした。(同掲書 : 189)

と、中林は述懐している。軍隊方式で、実力行使も辞さぬ血をかけた闘いであったことがわかる。

もうひとつ、太平洋戦争の体験が熊野灘沿岸の原発運動全般に影響した点として考えられるのは、国が決めて推進する計画に対する不信感である。太平洋戦争と原発計画は、それぞれ目的は異なっても国が決めて推進する一大計画であること、そして前者は国民全員が後者は特に立地場所周辺の住民が、大きな被害を受けたという点が共通している。

1960年代から熊野灘沿岸で国が電力会社と一緒に進めようとした一連の原発計画は、敗戦という、「国の事業の失敗」の事実が重くのしかかり、結果として住民に大きな不信感を及ぼしたのではない。「お上のやることだから従うしかない」という時代に、多くの家族や友人を亡くした。生き残った人々が「二度とだまされてはいけない」と考えるのは自然である。

以下、三重県の収集した戦争体験者の証言集より引用する。証言者は憲兵として満州で終戦を迎え、シベリア抑留を経て中国で収監、1956年に軍事法廷で不起訴とされて故郷の熊野市に戻っている。

(…) 古希と言われる年も越えた今、平和の尊さをしみじみと噛み締めている。最後に大きな声で叫びたいことは、二度とやってはいけない、二度と騙されてはいけないと言う事である (…)。 (三重県 1995)

また熊野原発反対闘争史は、立地地元で反対する人々の思いについて次のように述べている。

原子力発電は国策であるとする、国や県の姿勢に反発を感じた人々は少なくない、「国策」といって戦場にかり出され、大切な青春時代を棒に振った。後で何もしてくれなかった。」という思いが、戦中派の人々には強い。(熊野原発反対闘争史編集委員会 1999: 29)

太平洋戦争が終わってまだ日の浅い時期、特に初期の反原発運動に関わった市民には、敗戦という国の失敗から被害を受けた経験が大きく影響したものと考えられる。そしてその危惧は2020年現在、福島をはじめとする各地で、原発事故の被害者が受けている経験と重なり合っている。

IV. 市民の持つ歴史認識

第Ⅲ章で述べたことは、第三者からみた地域の歴史と原発反対の市民運動の関連事項であった。これらの運動を担った当の本人である市民は、自分たちの地域の歴史をどのように認識し、それを運動に取り入れてアピールしているのか。本章では、市民本人の歴史認識を分析してみる。

以下は、芦浜第1回戦で古和浦の市民が作詞した、軍歌「歩兵の本領」の替え歌である。1964年8月、津市で開催された県下漁民大会で三千人がデモ行進しながら歌った。

原発反対の歌

作詞：植村健夫

- 一 黒汐踊る熊野灘 波路開きて二千年
水産三重の名も高く 若き漁民の血は踊る
- 二 我等のくらし犠牲に 原子の炎燃えるとき
漁場はたちまち荒れ果てて 魚族はついに滅ぶべし
- 三 この暴虐に耐えずして 我等は立ちぬ反対の
これぞ漁民の生命なり 腕を組みて闘わん

原発反対 大反対

(中林 1982: 83)

これがもともと有名な軍歌であることから、前章でみた太平洋戦争の影響が裏付けられるとともに、冒頭の歌詞「波路開きて二千年」からは、記紀神話の時代から熊野灘で綿々と続けられてきた漁師の生業の歴史が誇らかに歌い上げられている。この歌は、2017年に津市で開催された「熊野原発を止めた町」のイベントで紹介されていて、ネット上で聴くことができる(西村 2017)。作詞は芦浜第1回戦がきっかけであったと思われるが、三重県下の熊野灘沿岸における原発反対運動全般に通じる歌詞となっている。

南島町方座浦の出身であり芦浜第1回戦で活躍した平賀久郎(ひらがひさお)は、故郷を紹介して次のように記している。

千古の歴史と波浪風雪に耐えてきた熊野灘の、雄大なりアス式海岸が展開するところ、芦浜より東の海域に、古和浦が独立した入江を形成している。この湾奥内深くに漁村古和浦の集落が在る。(…)(平賀 1982: 242)

「熊野灘」を語るのに、枕詞のように「千古の歴史」が、やはり誇りをもって添えられている。「波浪風雪」のうち、「波浪」は何度もこの地を襲ってくる津波、そして「風雪」の「風」は毎年

のように上陸してくる台風を指すのであろう。数々の自然災害に耐えてきた熊野灘沿岸の市民が、今また原発計画という人災に耐え、これを打ち負かしたことへの自負が読み取れる。

この文章は、中林 1982 の巻末に著者紹介のために平賀が寄せたものだが、その終わりは次のような、歌人でもあった筆者の一首で結ばれている。

祖父（おおち）も父も生き来し 熊野灘
海を守れと 父祖の声する

先祖代々の生業の源である海、それを守ろうと二千年の歴史を背負った漁民が闘った心情が感じ取れる。

2000年2月、芦浜第2回戦が県知事の表明によって白紙撤回された後、稲葉輝喜南島町長は町民に宛てて次のような勝利の報告文を出した。

(…) このたびの北川知事の大いなる決断により芦浜原発計画に終止符が打たれた今、これまでの混乱を1日も早く修復し、「歴史と伝統を守り、自然と調和のとれた、明るく暮らしよい町づくり」を町民の皆様とともに推進してまいります決意でございます(…) (南島町 2002: 151)

単なる決まり文句の町政スローガンと見過ごされるかもしれないが、ここでもしっかり「歴史と伝統」に言及されていることに注目したい。そしてその「歴史」は、単に祖父や曾祖父の時代ではなく、ニシキトベにまで遡るのである。

おわりに

本研究第Ⅲ章では、熊野灘沿岸での原発建設計画の推移をまとめた。計画は1963年から2001年までの48年間に渡り、6ヶ所の計画地で8回の市民による反対運動がすべて功を奏し、中部電力、関西電力の二社は立地を諦めざるを得なかった。

電力会社側および原発計画を推進する政府側は、何とかこの熊野灘沿岸のどこかに原発を立地させようと、複数箇所を同時に発表することで自治体間の競争を煽ったり、1ヶ所で失敗すると一度選から漏れた場所に戻ったり、そこで行き詰ると一旦諦めた場所に再度現れたりを繰り返した。それが結果的に48年間、6ヶ所、8回という数字に表れている。

48年も経つと、当初の反対運動を担った市民は代替わりとなり、二世三世が登場する。なかでも特に熾烈な闘いが長期間繰り広げられた芦浜では、戦争世代による第1回戦は、戦争を知らない世代に引き継がれて第2回戦が闘われている。

このように時が流れ世代が交代しても、運動が引き継がれて計画を撤回させることができたのはなぜか。その理由の一端が、本研究第Ⅳ章で分析した、熊野灘沿岸の市民が引き継いでいた歴史にあることが明らかになったと考える。そして市民の側でも、その歴史を誇らしげにアピールしていることが、第Ⅴ章で示された。

それは決して「歴史が古ければ原発計画を撤回させられる」という短絡的な図式ではない。しかし、なぜあんなに反対運動が何度も繰り返されたのか、なぜ計画を撤回させられたのかと我々他所者が素朴な疑問を持つとき、記紀神話から昭和に至るまでの歴史が多くを説明してくれるのではないだろうか。

熊野灘沿岸の原発計画はすべて白紙撤回となった。しかし原発ができなくても破壊されたものがある。それは原発推進と反対に分断され、破壊された地域社会のつながりである。「熊野灘」という括りで団結交流し、カムヤマトイワレヒコを迎え撃とうとし、海賊として暴れ、水軍とし

てあるときは源氏を助け、またあるときは南朝を支持し、水運による物流を担い、大規模で組織的な鯨猟や漁業を行ってきた。この太古の歴史に育まれた地域社会が、昭和から平成のほんの短い一時期に出現した原発計画という異物によって破壊されたことを忘れてはならない。

ここで注意すべきは、原発ができてその事故によって避難区域になり住民は散り散りに・・・という類の、福島で起こったような地域社会の破壊ではない。計画が持ち上がっただけで、まだ何の建設工事も始まらず、どんな微量の放射能さえも発生していない時点での破壊である。

芦浜第1回戦では、同じ敷地を分け合う南島町古和浦地区と、紀勢町錦地区の隣同士の漁村で賛否が分かれ、共同の歴史が破壊された。中林は第1回戦を記録した著書のなかで次のように述べている。

古来、「錦女に古和男」といわれるほどに、両部落は親交があり、海を共通の生活基盤にしてきた。芦浜を挟んで漁業権を保有しているものの相互信頼と協調によって、操業はスムーズに行なわれ、漁業形態の異なるせいもあり、紛争発生といった事は一切なく、特に漁協同士の交流は長く南島町のほかの六漁協よりはるかに深かった。(中林 1982: 89)

「古来」からの協同の歴史が、まだ建てられてもいない原発によって破壊されたのである。たまたま敷地の海域が両漁協にまたがっていたばかりに。

それに続く芦浜第2回戦では、さらに悲惨な地域社会の破壊が起こった。最後まで原発計画の拒否権を有していた南島町古和浦地区で、金と脅しで買収が進み、一つの漁村全体が推進派と反対派の真っ二つに分断された。2013年の聴き取りで、反対をつらぬいた住民からは、いまだにかつて推進派だった隣人と出会っても挨拶しないとの証言を得ている。人口わずか1,700人ほど(1980年国勢調査、南島町 1984: 13)で、多くの住民が親戚関係という漁村の話である。外見は波静かな入り江にたたずむのんびりした漁村だが、そこに住む人々の内心に残した傷は計り知れない。

原発は一旦建設すると、稼働は40年、延長してもたかだか60年の施設である。しかも、便益を得た後は、10万年ともいわれる核廃棄物処分が待っている。2000年の歴史を誇る熊野灘沿岸と、そこに生業をもたらしてきて、今後ももたらし続けるであろう黒潮の恵みを比べたとき、どちらを選ぶかはひとりひとりの市民の人生哲学によるといえる。自分自身が子孫に何を残したいか、それが考え方の根本であろう。

かつて第2回戦で古和浦漁協反対派理事であった小倉正巳氏は、なぜ反対闘争に勝利できたのかとの問いに、「命かけたでさ」と答えている。さらに小倉紀子氏は、「先祖から受け継いだ海をこわさずに、次の世代に受け渡すのが私たちの務めやと思いました。」と語っている(柴原 2020: 184)。

ベトナムの原発建設予定地に住む先住民族、チャム人は2012年、原発反対のネット署名運動があった際に、逮捕の危険も顧みず命がけで署名した。同じ地元のベトナム人の署名は桁違いに少なかった。チャム人の詩人インラサラが著した小説「チェルフニット」⁶には、原発建設に抗議するチャム人の主人公が開所式当日、原発ゲート前で焼身自殺するシーンが描かれている。熊野灘2000年の歴史を背負った漁民と、バンドゥランガ⁷2000年の歴史を誇るチャム人の双方が、それぞれ異なる場所で命をかけて抗ったことがわかる。

命をかけた理由は、海を守るためだけではない。柴原は、漁民たちの発言として、「あいら、なめとる」という言い方を引いている(柴原 2020: 184)。「中電や県から来る原発推進側の人間が、反対する地元の市民を人間扱いしていない」という意味である。これは沖縄で新基地建設に

反対する市民に「この土人が」と叫んだ本土派遣の機動隊員にも通じる。原発や基地に反対する市民を自分たちよりも劣った存在と見なす差別意識がそこにある。

真に、柴原の言うとおりに、「人間としての誇りと尊厳をかけた戦いであった」（同掲書：185）のである。その誇りと尊厳の背景には、2000年の歴史の蓄積がはたらいっている。

芦浜の広大な原発建設予定地は、いまだに中部電力が所有していて、「私有地につき立ち入り禁止」の看板が立てられている。南伊勢町からの返還要求にも応じていない。この土地を会社は何に使うつもりであろうか。もしも何らかの迷惑施設を建てるというなら、2000年の歴史を背負った市民とまたも対峙することになるであろう。金力や政治権力を用いた闘いではすでに敗退を繰り返し、地域社会を破壊して熊野灘沿岸の歴史に汚点を残している。人間としての尊厳をかけた市民の闘いに勝るような計画はあるのか、いま一度胸に手を当てて考え直すべきであろう。事はすでに経済・経営学や工学の範囲を超え、哲学や倫理学の範疇に入っている。

ところで、日本に現存する17ヶ所の原発のなかには、熊野灘と同じく歴史が古い場所もある。そこではどのように原発が建てられたのだろうか。特に気になるのは、記紀神話にも登場しスサノヲが降臨したとされる因幡の国である。熊野と同様、伊勢に対比されて根の国、死者の国とされている。神々が住む浦々のひとつに屹立する島根原発は、なぜ建てることができたのか。今後の課題としたい。

謝 辞

貴重な証言を聴かせてくださった古和浦在住の小倉紀子氏、調査にご協力くださった柴原洋一氏をはじめとする「原発お断り三重の会」の皆様は心よりお礼申し上げます。同じく証言を頂いた故小倉正巳氏のご霊前に本稿をお捧げしたい。

本研究は日本学術振興会科学研究費、基盤研究(C) (26510007)「原発震災と市民社会研究」、基盤研究(B) (18H03435)「再生可能エネルギー技術移転による日越韓台持続可能社会実現ロードマップ策定国際研究」（代表者：坂本恵福島大学教授）をもとに実施した。ここに記して貴重な支援にお礼申し上げます。

参考・引用文献

- 朝日新聞津支局（1994）「海よ！芦浜原発30年」風媒社
- 浅里耕一郎（2012）「和歌山県に原発がやってくる」『原発を拒み続けた和歌山の記録』Ⅰ、寿郎社 pp.19-40
- 網野善彦（1992）「太平洋の海上交通と紀伊半島」森浩一ほか編著『伊勢と熊野の海』第三章一『海と列島文化 第8巻』小学館、pp.257-298
- 池田雅之（2020）「スサノヲの熊野とアマテラスの伊勢」池田雅之ほか編『熊野から読み解く記紀神話～日本書紀一三〇〇年紀～』扶桑社新書、pp.13-58
- 石原義剛（1982）「知らざる漁村の大きな事件」中林勝男『芦浜原発漁民海戦記』解説、技術と人間、pp.248-265
- 石原義剛（2007）「熊野灘を歩く－海の熊野古道案内－」風媒社
- 伊藤久嗣（1992）「伊勢・志摩の考古学」森浩一ほか編著『伊勢と熊野の海』第三章一『海と列島文化 第8巻』小学館、pp.185-224
- 稲本紀昭（1992）「伊勢・志摩の交通と交易」森浩一ほか編著『伊勢と熊野の海』第三章第三項『海と列島文化 第8巻』小学館、pp.331-368

- 今井 一 (2002) 「三重県海山町－原発推進派の住民投票」『世界』697号、岩波書店、pp.168-173
- 上村英明 (2015) 「新・先住民の『近代史』：植民地主義と新自由主義の起源を問う」法律文化社
- 内谷正文 (2020) 「原発夫婦－芦浜原発計画と闘った37年間のこと、あれからのこと、これからのこと－」ニコイチ映画社
<https://vimeo.com/ondemand/genpatsufufu?fbclid=IwAR0vSm8LZe2DPdiQKIHmMAXSsB5RnjpLfAp-P5Kwi7GOaBSrYmxDGCgcCQnA> (2020/09/26) (映像資料)
- 荻田章 (2012) 「模索～原発ができなかった町で～」NHK (映像資料)
- 北村博司 (1986) 「芦浜原発はいま－芦浜原発二十年史」現代書館
- 北村博司 (1997) 「芦浜の三十四年」反原発運動全国連絡会編『反原発運動マップ』pp.111-117
- 北村博司 (2001) 「原発を止めた町－三重・芦浜原発三十七年の闘い」現代書館
- 北村博司 (2011) 「新装版 原発を止めた町－三重・芦浜原発三十七年の闘い」現代書館
- 桐村栄一郎 (2020) 「熊野から日向神話の里へ」池田雅之ほか編『熊野から読み解く記紀神話～日本書紀一三〇〇年紀～』扶桑社新書、pp.165-234
- 熊野原発反対闘争史編集委員会 (1999) 「井内浦－熊野原発反対闘争史」三紀地区労働組合協議会センター
- 桑野淳一 (2009) 「熊野灘もう一つの古道－南島町 浦竈の謎を追う旅」彩流社
- 原子力資料情報室 (2017) 「原子力市民年鑑 2016-17」七つ森書館
- 小山清見ほか (1994) 「河村瑞賢」南伊勢町教育委員会
https://www.town.minamiise.lg.jp/section/kawamura/20180524kawamurazuiken_book.pdf (2020/09/10)
- 阪本敏行 (2011) 「熊野水軍－中世前期を中心にして－」谷川健一ほか編『海の熊野』II、森話社、pp.119-130
- しかたさとし (2017) 「海山町を知っていますか？ I～三重県には芦浜のほかにも原発を止めた町がありました」『月刊むすぶ』通巻553号、pp.12-17
- しかたさとし (2018) 「熊野原発を止めた町－計画阻止から30年 知ること 学ぶこと」『月刊むすぶ』通巻564号、pp.6-35
- 柴原洋一 (2020) 「原発の断りかた－ほくの芦浜闘争記－」月兎舎
- 高野澄 (2012) 「歴史を変えた水軍の謎」祥伝社黄金文庫
- 田上 繁 (1992) 「熊野灘の古式捕鯨組織」森浩一ほか編著『伊勢と熊野の海』第三章四『海と列島文化 第8巻』小学館、pp.369-415
- 谷川健一ほか編 (2011) 「海の熊野」森話社
- 寺井拓也 「五ヶ所の原発計画と反対運動、三、那智勝浦町と古座町の原発をめぐる」『原発を拒み続けた和歌山の記録』寿郎社、pp.130-141
- 土肥泰夫 (1997) 「熊野原発設置反対運動の経過」反原発運動全国連絡会編『反原発運動マップ』pp.118-120
- 富山洋子 (2018) 「和歌山の反原発運動の記録」『月刊むすぶ』通巻565号、pp.18-23
- 中上 紀 (2020) 「魂のゆりかごに還る」池田雅之ほか編『熊野から読み解く記紀神話～日本書紀一三〇〇年紀～』扶桑社新書、pp.107-163
- 中林勝男 (1982) 「熊野漁民原発海戦記」技術と人間
- 南島町芦浜原発阻止闘争本部 (2002) 「芦浜原発反対闘争の記録－南島町民の三十七年－」南島町
- 南島町町史編集委員会 (1985) 「南島町史」南島町
- 西尾泰広 (2018) 「地域からの『脱原発』－三重県『芦浜原発』設置計画をめぐる対抗から－」広川禎秀ほか編著『戦後社会運動史論③－軍事大国化と新自由主義の時代の社会運動－』大月書店、pp.203-230
- 西尾泰広 (2019) 「一九六〇年代原発設置計画地域における対抗－三重県『芦浜原発』問題をめぐって－」『歴史研究』第56号、大阪教育大学、pp.1-20
- 西村, TOM (2017) 「原発反対の歌」<https://www.youtube.com/watch?v=9RMUBO7l68Q> (2020/09/15) (映像資料)
- 日本科学者会議編 (2015) 「原発を阻止した地域の闘い」第一集、本の泉社
- 野村史隆 (1992) 「伊勢・志摩海民の漁撈と信仰」森浩一ほか編著『伊勢と熊野の海』第四章一『海と列島文化 第8巻』小学館、pp.441-482

- 原日出夫 編 (2012) 「紀伊半島にはなぜ原発がないのかー日置川原発反対運動の記録ー」 紀伊民報
- 反原発運動全国連絡会編 (1997) 「反原発運動マップ」 緑風出版
- 平賀久郎 (1982) 「中林勝男君のこと」 中林勝男 『熊野漁民原発海戦記』 技術と人間、pp.242-247
- 平林祐子 (2013) 「『原発お断り』 地点と反原発運動」 『大原社会問題研究所雑誌』 第 661 号、pp.36-51
- 福島原発事故の真実と放射能健康被害 (2018) 「日本の原子力発電所の所在地」 <https://www.sting-wl.com/worldmap.html> (2020/09/24)
- 布施慎一郎 (1972) 「那智勝浦における原発反対運動」 『日本の科学者』 第 7 巻 1 号、本の泉社、pp.34-35
- 三重県 (1995) 「三重県戦争資料館 111 人の語り部」
<https://www.pref.mie.lg.jp/FUKUSHI/heiwa/17468018292.htm> (2020/09/15)
- 三石 学 (2011a) 「黒潮と黒潮反流」 谷川健一ほか編著 『海の熊野』 第 I 章、森話社、pp.33-46
- 三石 学 (2011b) 「赤須賀船巡回と紀勢本線の開通」 谷川健一ほか編著 『海の熊野』 第 III 章、森話社、pp.201-212
- 森浩一 (1992) 「海人文化の舞台」 森浩一ほか編著 『伊勢と熊野の海』 序章 『海と列島文化 第 8 巻』 小学館、pp.9-64
- 森岡辰男 (1972) 「国立公園と原発基地」 『月刊社会党』 第 180 号、日本社会党中央本部機関紙局、pp.102-104
- 山内 譲 (2018) 「海賊の日本史」 講談社現代新書
- 山中 充 (2005) 「『魚と人と神と仏と』 九木浦協同組合 『正月袴屋行事』 についてーニラクラ祭りから鯛祭りまでー」 みえ熊野学研究会編 『熊野灘 磯の辺路紀行』 第 2 章、pp.109-137
- 山本昭宏 (2013) 「漁民と原発ー1960年代の芦浜原発反対運動に関する考察ー」 『二十世紀研究』 第 14 号、二十世紀研究編集委員会、pp.77-99
- 吉井美知子 (2014) 「地域教材を利用した開発教育の実践と考察ー三重県・芦浜フィールドスタディーー」 三重大学国際交流センター編 『三重大学国際交流センター紀要』 Vol.9、津、pp.55-71
- 吉井美知子 (2016a) 「日本の原発は輸出先でどのように見られているのかーベトナム、ニントゥアン省および周辺出身者への聴き取り調査よりー」 沖縄大学人文学部紀要第 18 号、那覇、pp.11-24
- 吉井美知子 (2016b) 「日本の原発輸出とベトナムの先住民族への人権侵害」 東アジア共同体研究所 琉球・沖縄センター紀要第 2 号、那覇、pp.75-87
- 吉川和之 (2020) 「鳥羽城主 九鬼嘉隆物語」 雑誌 『凧』 第 82 号、月兎舎、pp.44-49

-
- 1 別に、志摩市大王町からとする定義もある (石原 2007:4)。どちらの定義でも、本研究で取り上げる地域はすべて含まれている。
 - 2 正確には大白浜に隣接する向井浜 (むかいばま) に建設予定であったが、本研究では報道や先行研究に合わせて「大白浜」の名称を用いる。
 - 3 城ノ浜に関しても、短期間の反対運動があったとの証言がある。
 - 4 「立木トラスト」と呼ばれる運動で、2016年に筆者が現場を調査したところ5年以上の月日を経てまだ札が残り、氏名が読み取れるものもあった。予定地の向井浜までは道がなく、藪ごぎをしないと行けない。
 - 5 ただし、2011年3月11日の事故当日午後、古和浦では漁協に臨時の召集がかかっていたが震災で中止された。その後召集はかからず、芦浜原発計画の再々燃だったのではと推測されている。
 - 6 許可が出ないため出版されていない。
 - 7 チャム人が建てたチャンパ王国中の地域名。原発計画のあったニントゥアン省および南隣のビントゥアン省に該当する。

Local History and Citizen Movement - Reasons why all nuclear projects failed on the coast of Kumano Nada Sea -

Michiko Yoshii

Abstract

On the coast of the Kumano Nada Sea, on the east part of the Kii Peninsula of the Japanese mainland, there were six proposed sites for the construction of nuclear power plants. The projects were first proposed in the 1960s. All of them failed due to citizen opposition.

This paper aims, first, to describe these citizen movements, which continued for 48 years. Secondly, it will make a detailed analysis of regional history, going back as far as the mythological period that had an influence on the citizen movement of the region in the modern era. Thirdly, and finally, the paper demonstrates how the population considered their own history while taking actions against the projects.

The power companies took different strategies for their nuclear projects: they chose three different regions at once for the project, pushing them concurrently in order to succeed in one place if they failed in another. After a failure, they would return to another target, showing their absolute determination to build on at least one site on the coast. As a result, the struggle of the citizens lasted a long time, from one generation to another. The important role of female citizens was also discovered in this study.

This historical approach reveals the mythology that designates this region as a remote area thought of as a “nation of death”. The population is still devoted to a female tribal chief who battled against the future first emperor of Japan. There were three key elements, from three eras, that contributed to the 20th-century citizens’ movement: the Kumano Suigun (a privately-run medieval fleet), hogeï (traditional whale-hunting, which required complex organizational planning), and the experiences of local fishermen in World War II before they joined the citizen movement.

In their protests, the citizens themselves also appealed to their heritage. This study concludes that the regional history was an important element for the success of citizen movement. Finally, the paper emphasizes the damage that this struggle inflicted on the local community, as it divided people into pro and anti-nuclear groups. This damage has become a stain in the history of the region.